

# 女性文化研究所設立20周年を祝して

第三代所長 岩脇 三良

昭和女子大学・女性文化研究所が設立されてから20年を経たという情報を得たとき、もうそんなに月日が経ったのかと思いました。20年という時間的な長さは、それぞれの人に異なった印象を与えるでしょう。私自身、小学校を4回、転校していますし、旧制高校在学中に召集令状がきて、昭和20年には兵役を経験し、大学の在職も約10年ごとに他の大学に移動しましたので、20年も研究所が同じ目的で継続活動をされたことに敬服しています。特に、『女性文化研究所紀要』がこの20年間に休刊あるいは廃刊になることもなく、継続発行されてきたことは、まさに賞賛に値します。

四国88カ所を歩き遍路して、ある宿坊で洗濯をしていた時、観光バス遍路をしている団体の一員である年配の男性が洗濯場所に入ってきて、洗濯機の前でうろうろしていました。自宅で洗濯機をさわったことがなく、洗濯機の操作がわからないのだそうである。宿坊でお世話になれば、部屋やトイレを掃除して立ち去るべきであると思っていた私にとって、洗濯機の扱いも知らない男性遍路がいることを知って納得がいかなかった。その人の話によると、家事は一切したことがないそうです。おそらく、多くの日本の一般家庭では、まだ、家庭内の分業が根強く継続しているようです。

学問の世界でも、男女に格差があることは国際的に知られている。米国での研究は、小学校から高校までの生徒たちでは、学力検査でジェンダー差がないにもかかわらず大学では、生物学で PhD の46%が女性であり、物理科学では PhD の25%が女性であり、工学では15%にすぎないことを示した。米国の大学のアカデミック・スタッフでも物理科学、工学、数学などの学科では、女性が男性に比べて著しく少ない。日本では、大学や研究所における男女の格差が特に大きいことは広く国際的にも知られています。能力に大差がないにもかかわらず、理科系の学科に進学する生徒・学生に女性が少ない理由を明確に説明するにはまだ研究が十分でないようです。このような大学におけるスタッフの格差を明確にすることは昭和女子大学の「女性文化研究所」の課題の一つにしてもよい。

以上二つの例は、女性学・女性文化学における可能な課題を示唆するものですが、学際的色彩の濃いこの分野における研究成果は、20年にわたって刊行された昭和女子大学の『女性文化研究所紀要』に示されてきた。将来の日本社会に貢献することを期待して、この紀要がますます発展することを切願するものである。

(いわわき さぶろう 元大学院生活機構研究科教授)